



ニュース  
NO.61

発行年月日 1990年7月15日  
発行所 (社)国際MRA日本協会  
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4  
TEL.03-821-3737(代)  
FAX.03-821-6479  
発行人 住友 義輝  
頒 価 1部200円

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣



- 産業本位の政策を消費者本位に転換する
- “超国家”統合ECの誕生は世界の脅威か?
- 結果の出ない対話に米国民の忍耐は尽きた
- 黒字の西独はなぜ日本ほど叩かれない?

# コー円卓会議東アジアキャンペーン ●日米欧は自らの改革をどう進めるか●

## 東京・台北で開催される

日米欧の改革はまず  
日本から

コー円卓会議東アジアキャンペーンは去る四月十七日から二十四日まで東京と台北で開催された。昨年の発展途上国(インド)訪問に続いて本年はNIES(新興工業経済群)との交流を深めたいという欧米側の希望と、日本改革へのビジョンを示し欧米側の理解と協力を得たいという日本側の希望とが重なり二カ国にまたがるキャンペーンとなった。

都ホテル東京での二日間の円卓会議は、「日米欧は自らの改革をどう進めるか」というテーマで行われ、日米欧が一セッションずつを受け持ち、自国(地域)の現状、問題点、改革への自助努力等を示してそれに関する活発な質疑や討論が行われた。

初日の冒頭、日本人参加者は昨秋からの合計三回、延べ十時間以上にわたる討議と個別インタビューを通してまとめた日本改革案「真に世界に貢献できる日本を築くために」

### ◀主な内容▶

■コー円卓会議東アジアキャンペーン・レポート —日米欧は自らの改革をどう進めるか—	1 P	■1990年コー世界大会のご案内 テーマ「様々な変革の動きを活かすために」	14 P
■「台湾円卓会議に参加して」 三菱総合研究所社長 奈良久彌	7 P	■「東欧がアフリカ独立闘争の歴史から学ぶこと」 元MRA駐ザンビア代表 テリー・ギルブライト	15 P
■「真に世界に貢献できる日本を築くために」 —コー円卓会議日本側参加者による日本改革案—	9 P	■「悲しみはメコン川に流して」 ●第二の祖国ニッポン● ラオス系日本人が見た日本社会 竹原 茂(ウドム・ラタナヴォン)	17 P
■世界のMRA最新の動き <b>MRAワールドニュース</b> ●インド・イギリス・台湾・ポーランド・オーストラリア●	11 P	■アフリカ・ザンビアで過ごした2年間(その10) ●外国援助とザンビア—ザンビアが自立する日のために	21 P

を発表した。(9ページ参照)

昨年来の日米構造協議(SII)や日本異質論で日本社会全体のあり方が問われているが、この改革案は本来日本が自ら始めるべき改革の理念とビジョンを明らかにすると共に、経済人自らが犠牲を払うことよって変革を推進する触媒の役割を果たしていこうとするものである。この改革案に対する欧米側のコメントや質問が何回か求められたが、賛辞こそ寄せられたものの具体的なコメントは殆ど出されず、むしろ、こうした建設的な提言の存在が自国の反日論者に対する説得に役立つとする人が何人かあった。

ある日本人参加者は

「この改革案の本身は実現が難しいことばかりである。しかし、日本が世界で生き延びていくためには遅くとも二十一世紀までにはこれら全てを実現していかなければならず、しかもその多くはここ二、三年で達成されるべきものである。色々と障害も多いが、それらを克服して何としても実現しなければならぬ」と熱っぽくその決意を語った。

この改革案はいわば今回の円卓会議のゴール(出口)を最初から示した形となり、その後二日間の討論は、自国における相手国に対する感情や

パセプション(認識)に対する危機意識の表明と、そうした状況の中で互いの立場と努力をいかに支援していくかに多くが費やされることになった。

まず市場開放・輸入促進政策などによるインバランス(貿易不均衡)は正のための努力を日本側が示したのに対してアメリカ側は、

「もはや約束だけでは駄目でインバランスの数字が変わらなければアメリカ人の怒りはおさまらない。米国の赤字自体は米国自身の問題だが、日本との貿易赤字が常にその多くの割合を占めているという事実と閉鎖的な日本市場というイメージとが日本に対する感情を悪化させている」と、一般国民のフラストレーションの高まりを紹介した。

さらにこれまで自由貿易を唱えてきた人々が突然反日的に変わっていることも指摘され、具体的な結果が出なければ世論に押されて政治がますます敵対的になってしまふとの危機感が表明された。

一方日本側は、

「やるべきことをやらずに日本批判ばかりしている米国はアンフェアであるとの反米感情も一部に芽生えており、その方が米国の反日感情よりものはるか心配である」と指摘した。

# 「円卓会議東アジアキャンペーン」【東京・台北】

## 参加者リスト (T)台湾参加

一九九〇年四月十七日(土)～二十四日(火)

### ■ヨーロッパ

(T)フレデリック・フィリップス (オランダ) フィリップス社元会長

オリビア・ジスカルデスタン (フランス) ヨーロッパ経営大学院(INSSEAD)副理事長

(T)ネビル・クーパー (イギリス) トップマネージメント・パートナーシップ会長

(T)ピーター・ワグラー (スイス) インター・アリアンス銀行頭取

(T)アルフレド・アンブローゼイ (イタリア) アンブローゼイグループ会長

アクセル・イペロート (スウェーデン) アドバストインターナショナルマネジメント社会長

(T)リチャード・パーク (アイルランド) 元EC副委員長 キヤノン財団理事長

### ■アメリカ

オーエン・バトラー CED会長 P & G社前会長

ロバート・イーグルストン キャピタルグループ会長

ウエルドン・ギブソン SRIインターナショナル名誉相談役

(T)ノックス・ジョンソン

ジョン・モア

(T)ジェイムズ・モンゴメリ

ロナルド・ネイター

経営コンサルタント 前SRI専務理事

### ■日本(五十音順)

植村光雄 (住友商事相談役)

小笠原敏晶 (ジャパンスカイライン社長)

岡村 昇 (本田技研工業常任相談役)

尾関雅則 (鉄道総合技術研究所理事長)

賀来龍三郎 (キヤノン会長)

金森茂一郎 (近畿日本鉄道社長)

(T)阪本 勇 (住友電気工業相談役)

(T)住友義輝 (住友電気工業常任監査役)

清水 榮 (東芝副社長)

瀧山 養 (元日本国有鉄道技師長)

田淵範也 (野村證券会長)

(T)豊永恵哉 (松下電器産業専務取締役)

中島正樹 (三菱総合研究所相談役)

(T)奈良久彌 (三菱総合研究所社長)

(T)松岡紀雄 (神奈川大学国際経営研究所教授)

これに関連してヨーロッパの参加者は、「NOと言える日本」(石原慎太郎・盛田昭夫共著)は相手側に反感を引き起こし、互いに「NO」と突っ張りあう悪循環を招きかねない。日本の強いイメージはすでに恐れを生み出しており、これに「NO」が加わると強い反日感情が生じ、その影響を受ける政治家を保護主義に追い込んでしまふ危険であると指摘した。

これに対して日本側から「まず日本自体が変わっていくことが先決で、これまでの産業本位の政策を消費者本位に転換しながら土地問題など具体的な問題を解決していくしかない」との意見が出された。

初日のランチのゲストスピーカーの下村満子朝日新聞編集委員(現朝日ジャーナル編集長)は、「同質的で変わることが難しいとされた日本の国民だが、静かな思考革命が着実に進行している。経済奇跡の担い手であった官僚・会社人間・男性が最も変わらないのに対して、女性・若者・老人・外国人が違った生き方、主張、表現を行うようになっており、この動きが日本を、異なった文化や社会の人々とも一緒にやっつけていける社会に変えつつある」と示唆に富んだ論を展開し、欧米側から多くの質問やコメントが出された。

## EC統合は欧州の構造改革

初日の午後に行われたヨーロッパに関するセッションでは、ヨーロッパ再編に関する参加者の意見の多様性が浮き彫りにされた。EC統合を推進してきたある参加者は、

「欧州共同体作りとは、そもそも三十年にわたる行政や法律の調整も含む構造改革のプロセスであり、これまで対立要因でもあった民族国家を超えた「超国家」を作ることによって欧州全体が世界に貢献しようとするものである。EC自体が強力なパートナーになることが日米欧の摩擦解消にも役立つ筈である」と述べた。

また、もう一人の統合推進論者は、「欧州全体がグローバル化することが重要で、企業も各国を代表する企業ではなく真の国際企業として発展することが不可避である。二十一世紀に生き残る自動車メーカーが世界中で五社しかないとすれば、それは米国二社、欧州一社、日本二社といった形ではなく、国際企業に脱皮した五社だけがそれに値する」と述べた。

これに対してECに加盟していないヨーロッパ諸国の参加者からは、「欧州内の基準統一は必要だが、E

Cは所詮クラブであり、他の国を除外すると共にEC自体が内向化する恐れがある。経済ブロックに入っていない国々の方が高い成長を遂げている事実から学ぶべきだ」という批判や、

「ECだけでは全欧州をカバーしておらず、ECとEFTA(欧州自由貿易連合)とが連携して初めて欧州全体として東欧の安定や欧州以外の地域との交流に役立つ」との注文が出された。

ドイツ再統一に対する不安に対してEC側の参加者は、

「西独を通して東欧の工業化や繁栄を助けるという観点から、ドイツ再統一に協力すべきである」と答えた。また、東欧の市場経済を促進するために経営管理者のトレーニングが最も必要であるとの意見も出された。

一方、黒字を抱える西独がなぜ日本ほど批判を受けないのかとの日本側の質問に、ヨーロッパの参加者は、西独市場は完全な自由市場で規制が全く無いことやEC予算の三分の一を拠出するなど様々な貢献を行っていることなどを挙げた。

これに関してアメリカの参加者は、「全世界に対して赤字を持つ米国にとって西独との赤字は経済問題の一つにしかすぎないが、閉鎖市場と見



●400人近くが参加して行われた国際シンポジウム「激動の世界—日米欧は自らの改革をどう進めるか」(経済広報センター共催)



●経済同友会幹部との昼食会で河合三良経済同友会専務理事(右)と意見を交わす欧米側参加者

られている日本に赤字が集中していることは経済問題を越えた政治問題と化している。つまり政治家は自らの責任を日本に転嫁しているわけである」と解説した。

「大人」としての欧州の自信を感じさせるセセッションであった。

## 本音の話し合いこそ コー円卓会議の特徴

二日目の午前中はアメリカに関するセセッションが行われた。「アメリカは自らの改革をどう進めるか」というテーマの下、まず司会者から財政赤字削減、教育改革、生産性向上、ウォールストリートなどでの企業倫理の確立などアメリカの課題が述べられた。

次いでアメリカ側は、対外関係で統一した見解を打ち出しにくい仕組み、ロビー活動や利益集団が活発に動き客観的な対応が取りにくい現状、そして誤った情報や偽りの情報の影響に脆い政治システムなどアメリカ社会における意思決定の難しさを説明した。そして日本は信頼できない国であるというイメージや、結果の出ない対話に忍耐が尽きたというアメリカ世論の実情を正しく伝えることこそ「真理」を伝えるコー円卓会議の精神であり、こうした現状を打

開するにはMRA精神に則って双方が変わるしかないと訴えた。

ヨーロッパ側からは、

「言葉だけではなく行動をと日本に言っているアメリカ自身は具体的に何をしているのか」という質問や、

「増税なしで実際にやっていけるのか」といった単刀直入な問いも投げかけられた。

また、すぐにボイコットや立法措置に訴えるという脅しの手法や、主権を持つ外国に文化を変えろと迫ることの妥当性、国民に真実を伝えずに他を非難する政治風潮に対する疑問も投げかけられた。

これに対してアメリカ側参加者は、「自分はメッセンジャーとしてあくまでアメリカの実情を伝えようとしているだけで、アメリカの実情そのものを是認しているのではない。今のままでは政治が単独行動を起こしかねない状況まで追い込まれているので、そうならないうちに日本側が行動してくれないと取り返しがつかなくなるということも伝えられた」と述べ、別のアメリカ人は、これまで自分は日本を弁護してきたが故にマスコミの非難を浴びてきたと語ると共に、外圧によって改革を進めようという姿勢が結局互いのパッシン

グを強めているとも警告した。

一方アメリカ側からは、教育改革に向けて企業が取り組んでいる活動（就学前児童の教育・カリキュラムの改良・学校の再編成・教育の質の向上）や生産性向上に関するイニシアティブ、そして多国籍企業としての国際協力など企業による自助努力の成果も紹介された。

日本側からは、最近、新聞の論調を初め社会全体が改革に向かっていくとの報告があったほか、ソロバン勘定に合わないようなことでも積極的に行うなど世界との付き合い方に配慮を払っていくべきとの反省の声も出された。そして日本がまず変わることが先決で、そうすることによってアメリカも本来取り組むべき教育や麻薬などの問題に取り組めるという意見も出されたが、諸外国に開かれたアメリカ社会がこうした問題を解決することが極めて困難であるとの苦悩と苛立ちも表された。

これに対してヨーロッパの参加者は、「こうして相手に対して感じている本音を言い合えることは素晴らしい。意見の対立があっても友人として一緒に問題解決に努力できるのがコー円卓会議の特徴であり、相手の気持が分かってこそ自ら改革を始めるといふ本来の目的が叶えられる。今ま

### 入会のご案内

- |          |    |    |           |
|----------|----|----|-----------|
| (1) 正会員  | 個人 | 年額 | 3,000円    |
|          | 法人 | 年額 | 50,000円   |
| (2) 賛助会員 | 個人 | 年額 | 1,000円以上  |
|          | 法人 | 年額 | 50,000円以上 |
- 郵便振替口座  
東京八一三八二八九  
口座名 社団法人  
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌「MAJ」ニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度「50,000円（寄付扱い・年額）」を新たに設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号  
東京五一四一三六六五  
口座名：社団法人国際MRA日本  
協会特別協力年会費

でアメリカはいつも与える側の国であり、世界中がそれを当然と受け止めてきたが、世界中から利用されているとアメリカが感じるようになれば、忍耐力を失って敵を作ってしまうことがある。そうならないように皆で助けなければならぬ」としめくくった。

参加者は、自国に戻ってできることから影響力を行使し、変革への触媒の役割を積極的に果たすと共に環境問題や南北問題など共同で取り組むべき課題にも取り組んでいくことが確認され、これまでにない突っ込んだ討議が展開された円卓会議が終了した。会議終了後は最近、社員が自主的に結成した東芝フィルハーモニー管弦楽団員による弦楽四重奏、手品、歌の交換など、いつもながらの和気あいあいとした交流が行われた。

翌四月二十日には啓蒙活動の第一弾として経済広報センターとの共催による国際シンポジウムが経団連会館で開かれた。二日間の円卓会議の真剣な討議の内容が二百五十名の経済人、政治家、ジャーナリスト、労組役員などに紹介され、その真摯な姿勢は感銘と感動を与えた。(講演録は近々出版の予定である)

## NIEESで最初の円卓会議

東京での円卓会議を終えた日米欧のメンバー一行は、四月二十二日、次の訪問地台北へと向かった。その晩にはMRA基金主催の夕食会があり、胡兆揚会長を初めとするMRAメンバーの暖かい歓迎を受けた。

翌二十三日の午前は、総統府に李登輝総統を尊敬した。李総統は台湾出身者(内省人)として最初の総統であり、三月の総選挙で圧倒的な信任を得た自信と責任を漂わせる一方で、京都大学やアメリカの大学で学んだ知性と、牧師を父に持つ背景からか高潔な人柄を感じさせた。一人ひとりと言葉を交わしながら一行を暖かく迎えて下さった李総統は、約二十分にわたり世界の情勢と展望について言及し、コー円卓会議の意義についても高く評価されたのに応じてオランダのフィリップス博士は、「三十年前、国際社会にとり残されたような島国の台湾への投資に悲観的な見方をする人が多かったが、自分はその後の動向を見守ってきた。この間に成し遂げられた成果には本当に感心している。この経験と実績は大陸の将来にとっても大きな助け

となる」と述べた。

同日の午後からは、台北国際会議センターに於いて全国工業総会との共催で台湾産業界のリーダーと、NIEESにおける初のコー円卓会議が開催された。「世界的な経済統合が進む中でのNIEESにおける機会と役割」、そして「地域の経済統合が進む中での企業の機会と役割」等をテーマに活発な意見交換がなされた。

台湾側の参加者からは、「NIEESの一員としての経験を開発途上の国々に伝えたい」、「品質管理等、これまで培った技術を中国大陸のために活かしたい」、「大陸との間の経済的ギャップを縮めるための協力が必要」などの発言が相次いだ。「皆さんが、揃って中国大陸の発展を考えている姿に感銘を受けた」という日本の参加者のコメントもあった。

また、経済発展にのみ目を向けるのではなく、文化や教育、そして精神的なものをもっと尊重していく必要があるという意見も台湾側の多くの参加者から述べられた。

これに対し、日本でも「消費者中心の社会への転換」というような言葉がキーワードになりつつあるとか、成長と利益のみでなくどのように企業が社会に貢献できるかを研究する

## 台湾側参加者

- 黄政旺 台鈴工業股份有限公司社長
- 莊國欽 遠東機械工業股份有限公司会長
- 林蔚山 大同股份有限公司社長
- 高清愿 統一企業股份有限公司副会長
- 許勝發 全国工業総会理事長
- 石滋宜 中国生産力センター理事長
- 高希均 天下文化出版公司社長
- 羅益強 フィリップス台湾社長
- 孫運璿 元行政院院長
- 金懋暉 中国鉄鋼公司社長
- 張國安 豊群投資股份有限公司会長
- 李國鼎 前経済部長・前財政部長



●台北国際会議センターで行われた台湾円卓会議(全国工業総会共催)

ため、企業倫理研究所を二年前に組織し、現在七百社が加盟しているとのイギリスの例が紹介された。引き続き全国工業総会主催の晩餐会が開かれたが、会議の時間の不足分を補うように熱心な話し合いが各テーブルで繰り広げられた。

## 二十一世紀の国際企業の新たな挑戦

翌二十四日には、再び台北国際会議センターで中国生産力センターと台湾MRA基金会の共催でパネルディスカッション「二十一世紀の国際企業の新たな挑戦」が開かれた。中国生産力センターの石滋宜理事長の進行で、全国工業総会の許勝發理事長、松下電器の豊永恵哉専務、そしてスイス・インターアリアンス銀行のピーター・フグラ―頭取の三名がパネリストとして発表を行った。

フグラ―氏の、

「現在では貿易ブロックはそれ程重要ではない。むしろブロックに属していないスイスや日本や台湾が経済的に成功している。もしスイスがドイツの一部になっていたら、単なる一州として埋没してしまい今日のような特徴ある国造りや貢献はできなかったであろう。台湾の日本に対する知識を活かして、欧州が台湾と提

携していけば難しい日本市場への参入が効果的に行える」などのユニークな意見は会場を湧かせた。

また、企業の公害等に対する社会的責任などに関しての意見も含め、会場の参加者との活発な意見交換がなされた。

同日の午後には、新竹の科学園区を視察し、台湾のハイテク開発への熱意を肌で感じる機会を得た。

最後のプログラムとなった台湾MRA主催の夕食会は、台湾の若者によるコーラスや音楽を初め、手品なども披露される和やかで楽しいものとなり意義深い滞在に花を添えた。

(終)



●台湾MRA関係者との交歓の夕べで参加者にコーラスを披露する台湾の若者たち

## 新しいビデオのご案内

日本語吹替版  
(VHS/ベータ)

# 明日を愛するがゆえに

—— イレーヌ・ロー夫人の生涯 ——

頒価 5,000円  
(郵送料サービス)

ドイツを仲間外れにして  
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇氣ある  
人々により始められ後のEC  
設立の礎となった。

お申し込みは  
MRA事務局へ

03(821)3737

好評頒布中！



●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人として母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

# 台湾円卓会議に 参加して

三菱総合研究所社長  
奈良久彌



(なら ひさよし) 大正12年大分県に生まれる。昭和22年に慶応義塾大学経済学部を卒業後、三菱銀行に入行する。人事部副部長、総合企画部長等を経て取締役人事部長就任(昭和50年)。常務取締役(昭和54年)、専務取締役(昭和57年)を経て昭和61年、副頭取に就任。平成元年、三菱総合研究所取締役社長に就任。

## 初めて台湾を訪れる

香港からの帰路の機内アナウンスで、ただ今台湾上空を通過中との案内があり、日本に近く、かつ最も友好国である台湾に早く行きたいと思いつつも、今までその機会がありませんでした。

それは私がつい最近まで勤務しておりました三菱銀行の拠点が台湾になかったためでしたが、昨年末、三菱総合研究所に参り中島正樹相談役、並びに近鉄の金森社長からMRAのコー円卓会議は二十一世紀を展望した極めて内容の濃い会議だから参加するようにとのアドバイスを受け、そのおかげで台湾に行くことができ次第です。

僅か三泊、それも台北だけの旅でしたが、私にとって全てが印象深い有意義なものでした。飛行時間は二時間半程度であり私

共は幸い羽田から出発しましたが、もし成田から出発すれば都心から成田へ行くまでの時間の方が長く、日本の空港の不便さを改めて感じました。

台北空港に定刻に到着し、市内のグランド・ハイヤット・ホテルに宿を求めました。完成したばかりで大変々とした立派なホテルで驚きました。

ハード面はもとより従業員の訓練も行き届き、これは後程申し上げる教育の成果であると感じました。ことに若い人達が英語を充分マスターしていることは、台湾の方々がいか国際社会に積極的に参加しているかということの証拠と思えました。

その日の晩は台湾のMRAの方々による歓迎会が開かれ、大変和やかな雰囲気の中で暖かく迎えていただきました。特に感激いたしましたのは現在サンフランシスコにお住まい

で、かつて東京女子医大卒業された林黄彩霞先生がわざわざ私共の会に出席されるために来台されたことです。人を暖かく迎えるMRAの精神を地で示されたものです。

## 李登輝總統との会見

二日目は李登輝總統との会見が行われました。世界を代表する指導者のお一人にお目にかかるので緊張した気持ちで總統官邸に参り、広いレセプションルームでお待ちしました。席順はアルファベット順で、私は

Nですからちやうど真ん中でした。午前十時三十分、時間通り李總統が

お目えになりました。堂々たる体格で、しかも極めて自然体で私共を心から歓迎して下さり感激いたしました。英語も日本語も完璧であり、台湾をいかにしてよくしていくかということについて自信と気力に溢れておられました。

總統はMRAをよく理解され、モラルや倫理観を維持し世界に拡げていくことの重要性を説かれ、自らも世界の平和と自由とデモクラシーを推進していくとおっしゃいました。

また経済の面では、世界の経済は激しく変化しつつあり、世界の焦点はアメリカとヨーロッパから今や太平洋地域に移りつつあり、コー円卓



●李登輝總統(前列中央)を囲んで(總統府)

会議が台湾で開催されたことはその面でも大変有意義である。NIES(新興工業経済群)と日米欧との関係は世界経済の展開の上でも極めて重要であると話されました。さらに日本とNIESの間には多くの類似点があり、それは中国の伝統的な文化を共有している点であるとのこと、それは誠に思いました。

また總統は、一番重要なことは教育であると強調されました。この点は前に触れました通り、一般の庶民階級に教育、それも語学を含めた国際教育が浸透していることを直接感じ、台湾が国際社会の一員として活躍するための最大の戦略として推進

した成果であり、まさに国民一人当たりの外貨保有高が世界のトップに達したのもひとえに教育の成果であります。日本も国際社会の一員として尊敬されるためには、徹底した国際教育を行う必要を痛感いたしました。

## 「上善如水」の心で

總統との会見の後には、台湾の政財界のトップの方々の出席を得て、円卓会議が数回にわたって行われました。私は夕食会で次のようなスピーチをいたしました。

「老子の教えに『上善如水』があります。即ち、上善は水の如し。水は善く万物を利して争わず。衆人の悪む所におる。人間にとって最も理想的な生き方は、いわば水のように全てのものに恩恵を与えながら、相手に逆らわず、人の嫌がるどころへ流れていって役目を果たすことだと説くのです。

日本人の祖先もその水路海路を利用して二千年前から中国にも渡り、多くの教えを受け、また、驚くべきことは一五八〇年には九州の三大名が四名の少年（天正遣欧使節）をヨーロッパに送り、ローマ法王に謁見した史実があることです。

このように私共の祖先は決して閉

鎖的ではなく、むしろ積極的に外国との交流を深めていきました。それが近代になって近隣諸国に迷惑をかけるような行動に出て、日本人は異種民族であるとの見方をされるようになったことは悲しいことです。私共は諸外国のカルチャーをよく勉強し理解して、世界市民の一員として諸外国から信頼され尊敬されるようにしなければなりません。グローバル化は、人、物、金、情報の国境を越えた大きな流れの中にあります。先程の老子の「上善如水」に照らしてグローバル化を考える必要があると思います。

すなわち、ビジネスの流れも自分だけの流れ、自分だけの水と考えること、自社だけの、自国だけの、周辺地域だけの利益を考えて、グローバルな清々たる流れをせき止めた、樟さしたりしないことだと確信します。MRAの精神もまさにここにあり、教育こそ二十一世紀に向けての日本の最大の課題であると思っています。

台湾に参り、周囲が非常に教育に熱心で、ことに国際感覚を若い間に身に付けるよう教育しているのを目の当たりにして、日本としても学ぶべき点が多々あることを改めて強く感じた次第です。

(終)

## MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

# CHANGE

THE NEW INTERNATIONAL MONTHLY MAGAZINE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

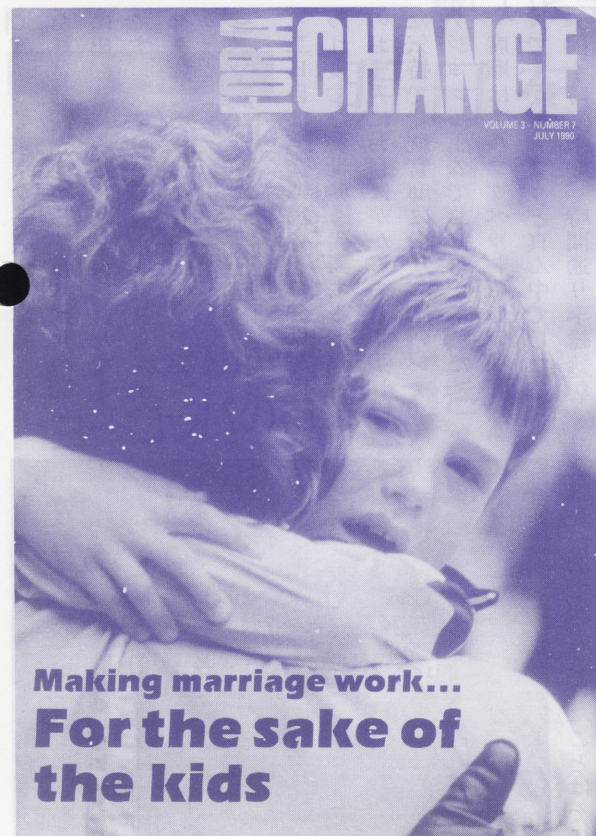
●フルカラー16ページ

●ニュースマガジンのニューウェーブ

●世界中の情報をすばやくあなたに

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間11回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期購読料（3ヵ月分＝¥1,000 1年分＝¥4,000 ※共に郵送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4  
社団法人 国際MRA日本協会  
「フォー・ア・チェンジ」係





## 真に世界に貢献できる日本を築くために

### —コー円卓会議日本側参加者による日本改革案—

日米欧の経済人によって構成されるコー円卓会議は、「日米欧間に真に互恵の関係を構築すると共に、日米欧以外の地域に対する共同責任を積極的に果たすこと」を目的としている。参加者は「倫理的価値（モラル）を尊重し、他を批判するよりも各自の立場で自らが正すこと」によって、必要な変革をもたらす触媒の役割を果たす」ということをモットーとしている。

コー円卓会議東アジアキャンペーン（一九九〇年四月）において提言されるこの改革案は、日本の問題を自分の問題として受け止め理解と協力を表明している欧米側参加者各位、並びに日本の関係者各位に供するものである。

一九九〇年四月十八日  
コー円卓会議日本委員会

世界は今新しい時代を迎えようとしている。多くの国々は懸命に自己改革に務め新たな対外関係の構築を模索している。

敗戦国日本が戦後速やかな経済発展をとげ、今日の経済大国と呼ばれるほどの地位を確立できたことは、ひとえに世界の安定と自由貿易体制によるもので、その指導的役割を果たしたアメリカ・ヨーロッパをはじめとする各国のこれまでの努力に改めて感謝を表すものである。

その経済大国日本が、今や新しい時代を迎えようとする国際社会の中で恐れられる存在となり、孤立化の

様相を深めていることは憂慮にたえない。日本は、これまでの独り歩きをやめて世界の安定と自由貿易体制の維持発展のために力を充分發揮して貢献する時代に至ったのである。今我が国が最も問われているのは新しい時代に向かって自らの針路を変えうる内部調整能力と意思決定能力である。世界と共有できる理念（モラル）に基づいて、人も企業も社会も自らが変革を遂げる以外に現在の国難を乗り切る道はない。

日米構造協議でアメリカ側が指摘している内容のほとんどは前川レポートに示されているもので、この実

現は日本国民に恩恵をもたらすと共に、世界と協調できる日本作りに大いに役立つものである。目先の利益にとらわれた「総論賛成・各論反対」は却って摩擦の火種となるばかりか、根本問題の解決を先送りにするのみである。今や日米両国は、世界の他の国々や後世の人々の存亡にもかかわるようなより深刻な問題に手を携えて取り組んでいくべきである。

### 一、世界との共存共栄に 基本理念を転換

#### —倫理国家構想—

いつの時代でも根本的な変革には明確な理念が必要である。これまでに「追いつけ追い越せ」の旗印のもとで、自分や自分の属する組織のことをまず第一に考えてきた日本は、「世界の共存共栄に貢献すること」を最優先とする倫理的な国家理念に転換をはかるべきである。一方、世界に存在する不均衡（imbalance）と格差（gap）

の是正や、社会の諸問題の解決に積極的に貢献することがこれからの企業の在り方でもある。国内のインバランス（資産格差）、先進諸国とのインバランス（貿易、投資摩擦）、途上国とのインバランス（飢餓や貧困）、次世代とのインバランス（地球環境問題）等に国として、又、企業として積

極的に取り組むことである。これには、節度をもって自らを律するような企業倫理を、企業自らが確立し実行することが前提であることは言うまでもない。これは決してきれいごとではなく、世界との共存共栄がなければ国や企業の存在そのものが危うくなるという、今後の世界の現実

### 二、産業第一主義から

#### 消費者第一主義への転換

明治以来の殖産興業などの生産者本位の政策を消費者本位の政策に転換することが国内改革の主目標である。これまで立場と利益を異にすることが多かった生産者と消費者との連携によって、政治と行政の改革に「内圧」をかけることができる。これには、これまで最も恩恵に与つた企業がある程度権益を失うことを甘受する姿勢が必要である。

国内インバランスの元凶である土地問題の解決には、税制を主役とした含み資産の見直しが必要である。この見直しにより企業が痛手をこうむることになるが、これまで最も恩恵に与つた企業が「犠牲をほらう」という範を示すことが、消費者第一主義への転換の原動力となる。産業保護育成のための諸規制の緩

和、国内のインフラ整備のための公共投資、生産者と消費者を結ぶ企業市民活動の推進、金融・土地・行政などに関するオンブズマン制度や情報公開制度の導入なども行う。

### 三、包括的改革と

#### システムの再構築

##### 平成維新

小手先の改革では、入り組んだ利害が衝突し、政治や行政とも一体化して特定の利益を守ろうとするエゴが国全体の利益をつぶしてしまふ。行政、政治、教育、土地、税制、産業政策などを含むトータルな改革の同時進行でなければ実現が難しい。皆で一緒に痛みを分かちあうことによりって国家全体のシステムの再構築を行うことを目指すべきである。

前川レポートをフォローし、構造協議の内容を実現させる調整機関を設置する。既得権者に生じる不利益に対する対応や、別角度の利益と調整する法律的対応も検討を要する。世界が大きな転換を遂げているという認識の欠如が、日本の改革を遅らせている。意識変革をもたらし、平和時における既得権の変革を伴う包括的改革を行うために、遷都、連邦制、道州制の検討も真剣になされるべきである。

### 四、世界の尊敬と感謝を得るための改革

「一国の最も確かな防衛は、隣国の感謝と尊敬を受けることにある」  
フランク・ブックマン

前述の基本理念のもとに以下のことを推進する。

- (A) 貿易摩擦の解消のために独禁法と管理貿易との間の関係調整を関係国間で行う。関係国の当事者同士の対話のルール作り。
- (B) 外国企業に対する内外無差別で透明なルールの確立。新規参入企業にプラスのハンディキャップなどを与える相互主義の取り入れ。既得権者に生じる不利益に対するルールの作成。
- (C) 難民、留学生、技術研修生の受け入れ、外国人労働者の保護など「内なる国際化」の推進。途上国への青年海外協力隊やボランティア派遣の拡大。国際機関や国連平和維持活動(PKO)などへの積極的な人材派遣。
- (D) 援助と開発協力の理念とあり方の見直し。途上国の健全な経済発展に向けての自助努力の支援が基本。援助に際しては環境アセスメント、住民保護に留意し、援助後のフォローアップに配慮。ODAを監視するオンブズマン制度の導入、援

助専門家の養成、プロジェクト評価制度の確立。

- (E) 外国人従業員を受け入れ、現地法人トップマネージメント及び管理職への現地人の登用、本社取締役会に外国人を登用するなどの対応。
- (F) 「平和への配当」という哲学を世界的規模のニューディール政策で実現しようとする世界公共投資基金(GIF)の推進。
- (G) 人類共通の資産としての基礎研究の推進、ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムなど科学技術を通じた国際社会への貢献。一方、無限に肥大する技術開発に節度をもたせるための基準の設定。
- (H) 地球環境問題への民間企業、消費者、市民団体などを含む積極的な取り組み。環境保全に必要な技術開発とその公開、これに伴うコスト負担受け入れに対する企業努力の推進。
- (I) 進出先のコミュニティで責任ある行動と貢献を果たす企業市民活動を進出企業や駐在員に奨励。
- (J) 従来モノや金、仕事を通じての交流から、人や文化に重きをおいたきめ細かな国際交流への転換。これが「顔のない日本」といったイメージチェンジにもつながる。

### 五、国民レベルでの「内圧」の形成と教育

日本の改革の推進は国民全体が担わなければならない。

日本が自ら行うべき改革を外圧に頼るのは、責任ある国民の姿勢とは言えないばかりか、危険なナショナルリズムを台頭させることにもなりかねない。消費者が勇気を持って言うべきことを言い、政府に対して改革の圧力(内圧)をかけていくことが必要である。政治家に対してノーといえる国民や、国民に対してノーといえる政治家を育て、支えること。これが真の民主主義社会であり、日本異質論で問われていることの核心でもある。

これには自らの価値観を持って責任ある行動ができるような国民を育てる必要がある。家庭教育・学校教育・社会教育の充実が望まれる一方、採用制度、人事評価制度の改善のほか、時代にそぐわない儀礼や慣行にとらわれた商習慣の変革、サバティカルイヤーの導入など、企業が手掛ける意識革命が社会の流れを大きく変えることができる。

▼インド・イギリス・台湾・ポーランド・オーストラリア ▲

### インド

#### 「正直こそ最良の政治」

ラジモハン・ガンジーは訴えた



マハトマ・ガンジーの孫でジャーナリストのラジモハン・ガンジー氏は、先頃ジュネーブで開かれた国連人権会議にインド代表団团长として参加した。昨年のインド総選挙でガンジー氏が、ラジブ・ガンジー首相（当時）の地元アメティ選挙区で出馬し敗れたことは日本でも新聞・テレビ等で報道されたが、その時の闘いぶりを伝える次のようなレポートがボンベイより届いた。

「当時の与党国民会議派の度重なる汚職と、ラジオやテレビをあくどく党利党略に利用することに愛想をつかしたガンジー氏は、偶然とはいえガンジー家に生まれたからにはインドの政治を正さなければならぬ」と宣言して行動を起こした。一カ月後に野党ジャナタ・タル党のV・S・シン党首は彼がラジブ・ガンジー首相と同じ選挙区から立候補することを承認した。アメティではラジブ首相のポスターがありとあらゆる壁に貼られていたが、「ポスターを貼る壁はなくともアメティの人々の心の中にその場所がある」とガンジー氏は言った。

わずか十六日間の選挙運動中、ガンジー氏はウシャ夫人と共に早朝から夜遅くまで村々を歩き、個人攻撃は一切行わず政府の不正を指摘し、「正直こそ

最良の政策、政治は正しあるべき」と訴え、当落を超越し、政治や行政に正直と清潔さを取り戻すために闘うことを誓った。

さらにアメティに住むイスラム教徒、ヒンドゥー教徒、ハリジャン（不可触民）、その他多くのグループの人々が協力し、アメティを全インドの模範となるように変えていこうと訴えた。ガンジー氏は敗れたが、投票日当日に政府・与党ぐるみで行われた恐喝や不正行為は広く非難された。「心の声」に耳を傾けるシン首相は少数派内閣を率いているが、多くの国民に支持されている。その後、ガンジー氏はシン首相から上院議員に任命された。

### イギリス

#### チェコスロバキア大統領の戯曲 「テンプテーション」(誘惑)、 ウェストミンスター劇場で 上演中



元々、反体制の劇作家であり、何回かの投獄の経験を持つ異色の大統領、バツラフ・ハベル氏の戯曲「テンプテーション」(誘惑)が、ウェストミンスター劇場(注1)で、この五月から夏までの予定で上演されている。

とある全体主義国家の科学研究所を舞台にした悪魔伝説の再来を描いた十五名の出演者と四幕で構成されるこの劇は、一九八七年にロイヤル・シエークスピア・カンパニーによつて初公演され好評を得た。

昨年来の東欧革命で出現した数々の新指導者達の中で、真に英雄と呼べるのはハベル大統領だけだろう。その卓越したリーダーシップと清潔な人柄に、プラハ市民は彼を「聖バツラフ」と呼び、プラハの守護聖人になぞらえたという。国民の圧倒的な支持を得たハベル氏が、ドプチエフ元共産党第一書記らと手を携えて鮮やかに無血革命(ハベル氏はベルベット革命と呼ぶ)を達

成した姿は私達の記憶に新しい。

今回、自らもチエコスロバキアの出身で、既にハベル氏の二つの戯曲を英語に翻訳しているトム・ストッパード氏を脚本コンサルタントとして迎え、最高の水準を目指した舞台がハベル氏とチエコスロバキア国民に捧げられるが、長い間、自由をごく当たり前のこととして受け止めてきた私達西側の人間にとっても、この劇から学ぶべきものが多いと思われる。



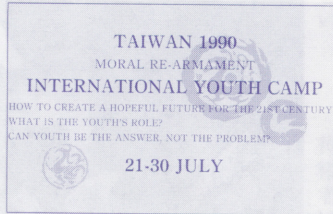
ウェストミンスター劇場

(注1) バックingham宮殿のすぐ近くにあるこの劇場は、第二次大戦で戦死したMRA関係者の供養のために1946年に建てられた。劇や映画の上演を通してMRAの考え方を伝える役割を担っているのを初め、MRAの国際情報センターとして映画やビデオの制作や出版事業なども活発に行っている。

## 台湾

### 台湾で初のMRA国際 青年キャンプを開催

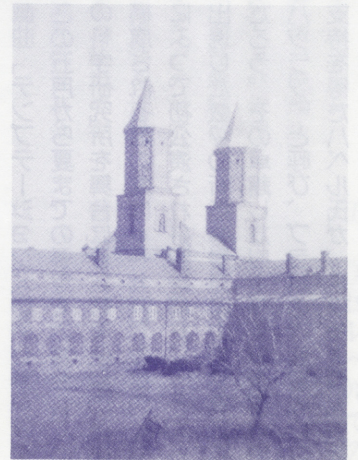
日本からも4名が参加



来る七月二十一日(土)より三十日(月)まで、台北、高雄などを主な会場に、台湾で初のMRA国際青年キャンプが予定されている。台湾から約三十名、そして海外からも二十名程度の参加が見込まれている。キャンプでは世界の若者達が、二十一世紀に向かって、様々な問題を解決していくためにいかに取り組むかということを中心テーマとして、民主主義や自由について意見を交わしたり、麻薬やギャングなどの問題解決への若者の役割を探る。

## ポーランド

### 東ヨーロッパに初のMRA センターが誕生



ポーランドの現指導者の多くは、これまでの自由を求める闘いの本質は、モラルと精神の再武装をもちとるためのものであると捉えてきた。従って、多くの団体の活動が法的に認められるようになったこの三月に、プシエミシルという町でMRAが正式に登録されたことは驚くに値しない。

そのきっかけとなったのは、ヤロスワフという町の近くにある古い修道院の建物をMRA活動のために提供したいというトカーチュフ司教からの申し出であった。トカーチュフ司教は、ヤロスワフの町を国際的な和解の場にしたいと考えている。

ソ連邦ウクライナ共和国との国境に近いこの地域は、一九四〇年代、及び五〇年代に内紛による大きな被害を被った。

孤独と静けさを求める旅行者は、プシエミシルの南方にあるピエシユチャイの一带を、文明からかけ離れたような未開の素晴らしい山岳地帯だと思うだろうが、その汚れなき美しさに目を奪われてはならない。

一九三九年以前にこの一帯に住んでいた人達は、第二次大戦中から始まったポーランドとウクライナのゲリラ戦に巻き込まれ、虐殺や追放の憂き目にあった。

ポーランドとウクライナの関係は古く、必ずしも敵対的なものであったわけではない。ウクライナは十五世紀にバルト海から黒海まで勢力を伸ばしたポーランド・リトアニア同盟に属していたことがあり、一九二〇年にポーランドとウクライナはソ連の侵略に対して共に武器を手に闘ったこともある。

しかし、この過去の暗い影が拭いさらされていない。古傷は癒しを必要としている。

二百年以上前に、ベネディクト修道会の修道女のために建てられたこの修道院は、大改修を必要としている。一七九五年のポーランド分割の際に、侵略してきたオーストリアの軍隊に接収されたこの建物は、以来、様々な人達の手を経てきた。建物には電気や暖房、排水、ガスなど基本的な設備が欠けており、新しく取り付けたり交換する必要がある。この建物を修復しようと住み込みで労働奉仕をする人も増えている。その中の一人は、この建物の維持管理に余生を捧げたいとまで言っている。六月下旬にここヤロスワフでMRAセミナーが開催されたが、これは東欧で開かれた初のMRA国際会議である。

## オーストラリア

### 第16回豪州MRAスタディー コース終了



去る五月十一日(土)に終了した第十六回豪州MRA青年スタディーコースに日本から浅沼秀穂君、北口治子さんの二名が参加した。コースの様子を浅沼君が次のように報告してきたのでご紹介したい。

「今回のコースにはヨーロッパ、アジア・太平洋地域の十五カ国から十七名の若者が参加しました。外国での、ましてや様々な国々の人との共同生活など経験したことのない私にとっては毎日驚きの連続であり、日常生活の、例えば食事一つとっても宗教戒律により口にできないものがある人があるのを見て、世界には様々な異なる文化、習慣諸々の違いがあることを実感しまし

た。

そして、このコースの学習で特に強く感じたことは、過去と現在の日本と他国の関係です。過去とは戦争のことを指します。私と同年代の台湾の女性やホームステイ先でお世話になったご婦人から「私は正直言つて日本人に対してあまりいい感情を持っていなかった」と告白された時は、少なからぬショックを受けました。

私は過去のことは忘れろと言うつもりは決してありません。戦争の悲惨さ、過去の過ちは語り継がれるべきだと思います。ただ、年号が昭和から平成へと変わった現在の日本人に対しても過去の憎しみが未だに向けられているということにづらい気持ちを覚えさせられたのです。

今回、バプア・ニューギニアから二名が参加しましたが、自分達の国で日本企業の乱開発のために自然が破壊されていると話していました。

カンボジア難民にも会いましたが、難民受け入れ問題に対して日本政府はどのような立場をとっているのかと聞かれました。

「議論するのはいい。だが、あなた達は私達の国に一体何をしてくれるのか」とレバノンの女性に言われた時、平和な国に生まれ、戦火が飛び交う彼女の国の情勢を正確に把握していない私達は、具体的な考えを示せるわけでもなく沈黙するしかありませんでした。

現在、日本では「国際化」という言葉が盛んに使われていますが、単にかけ声だけの「国際化」に浮かれ気分であるようだと各国から疑いのまなざしを向けられてしまいます。もちろん、これまで日本の政府、民間が続けてきた途上国への経済援助を初めとする数多くの貢献を知らないわけではありませんが、援助の全てがその国の将来を考えた上で行われてきたのでしょうか。

相手の立場を理解した上でとの関係づくりというのは、言葉で言うほど簡単ではないと思いますが、最初のボタンのかけ違えを正す努力を怠ると、取り返しのつかない禍根を残しかねません。また、大きな問題に一人で取り組もうとしても無理がありますが、簡単なことからでも相手を知ろうとする気持ちを持つて努力を続ければ、その積み重ねがやがて大きな力となり、将来の日本と他国のより良い関係を作る基盤に結びつくと思えます。

これまでの自分が抱いていた観念や知識を改めて検証し、新たに学ぶことができたのは大きな収穫でした」。

CAUX 1990  
July 9 - August 26

# コー世界大会のご案内

メインテーマ 様々な変革の動きを活かすために

## Freeing the forces of change

### 1990年MRAコー世界大会プログラム

7月9日～16日 **開会式**

「隣人同士、国同士、東と西が互いに学びあうもの」

7月18日～22日 **産業人会議**

「国際競争の激化と望まれる質と動機」

7月24日～25日 **日米欧財界人コー円卓会議**

7月29日～8月5日 **青年主催会議**

「新しいヨーロッパの形成をめざして」

8月7日～12日 **都市問題会議**

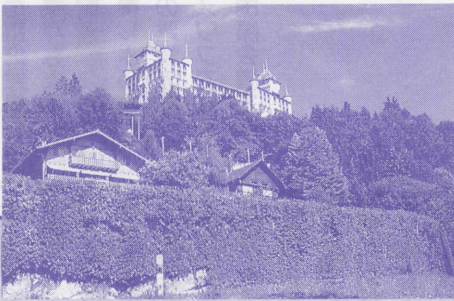
「都市の変革とコミュニティ危機の根本問題を考える」

8月15日～22日 **アジア・アフリカ・太平洋・  
中南米地域主催会議**

「共通の問題・共通の目的を担うパートナーシップ」

8月23日～26日 **閉会式**

「様々な変革の動きを活かすために」



#### マウンテンハウス

スイスのジュネーブから車で1時間半、眼下にレマン湖を望む標高1000メートルの村コー(Caux)にあるMRA世界会議場。

毎夏、世界中から集まった何千人という人々が静かな環境の中で様々な会議に参加する。また、料理、サービング、皿洗いなどの共同作業を色々な国の人々と一緒に体験することによって、チームワークや心を開くことの大切さを身を以て学び、相手の身になって物事を考えられる心が養われる。

International conference for Moral Re-Armament

## 新聞記事その他で見るMRAの歩み①

1948(昭和23年)～1989(平成元年)

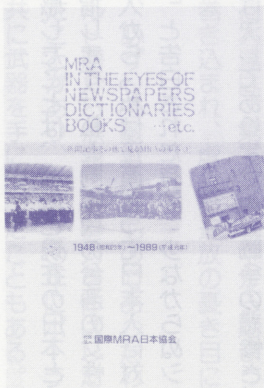
(内容の一部)

- 片山哲氏海外通信第一報世界平和の青い鳥 MRA大会に期待
- 日韓問題解決へ糸口 MRA大会で両国代表瀬踏み交渉
- 企業に浸透するMRA活動 東芝 国際会議に毎回参加
- 「GIFの基本理念とMRA」中島正樹

◇非売品ですがご希望の方に一部300円(実費)でお届けいたします。

お申し込みはMRA事務局へどうぞ TEL:03(821)3737

新しい出版物のお知らせ





●チェコスロバキア・ブラハの30の聖者像で有名なカレル橋

## 東欧が アフリカ独立闘争の歴史から

### 学ぶべきこと

テリー・ギルブライト

でなかったために、独立は僅か百人の大学卒業者と千人の一般教育修了証書(GCSE)を持つ人々によって新しい国家を運営していかなければならなかった。

BBCラジオによれば、ポーランドでこれまで政府の決定していた商品の価格統制が廃止されたため、値段をいくらしたらよいか分からなくなり店を閉めている商店が多いということだ。これは国民生活の全ての分野で意思決定の経験が不足していることを物語る一つの例に過ぎない。

### イギリスが学んだ教訓を ソ連の指導者に

勿論、援助の申し出は沢山なされているが、その中には、逆に彼らを食べものにしようとするものも混じっている。東欧諸国は借金をする際に、アフリカ諸国の教訓を心にとめておくのが賢明である。援助には付帯条件が付けられていることが多い

し、新しい国に対する純粋な援助というよりも、新市場獲得の可能性の方に目が向いている援助国もある。

それでは、悲しいかな新国家は植民地支配、あるいは共産主義支配をただ単に経済的従属と交換したに過ぎず、真の解放は遠のいてしまうこ

とになる。

かつて「帝国」を支配し、それを失った経験を持つ我々イギリス人が反省の中から得た教訓をソ連の指導者に提供することができるかも知れない。様々な意味で第二次世界大戦終了時における敵国への対処の方が、旧植民地に対してよりうまくいった気がしてならない。それは恐らく当時のイギリスが国際的連携のもとに行動していたからだろうが、我々は力を合わせて敗戦国の復興のため努力したのに対して、植民地の方は、自分達がいなければやっていけないだろうとか、もつとひどいのは期せずして失敗すると秘かにせせら笑う下等な気持がなかったとはいえないことだ。

私達は「物乞い国家」を生み出した過程で、新しい市場の開拓をせず、逆に返済不可能でいずれ帳消しにせざるを得ない負債の山を築かせてしまったのである。

### ゴルバチョフの壮大な計画

最近、タイムズ紙上で、ジェイムズ・ゴルドスミス卿は次のようにいくつかの注目すべきことを述べている。

ゴルバチョフ大統領は、新機軸を

### 自由の真の意味とは

新しい独立を獲得しつつある東欧の人々の喜びと希望にあふれた顔を見ていると、かつて様々な苦難の末に独立をかちとったアフリカ諸国の人々の顔が思い起こされる。

今後の課題は、東欧の国々が物質主義に走ることなく神の英知に導かれるようにどう助けていけるかという点である。アフリカでもそうであったように、他人が持っているものを何でも手に入れることが自由だ

と人々は思いがちで、高い人格と信念の持ち主を指導者に仰いで、新しい考え方で新しい国造りをする絶好の機会(時には犠牲を払うこともある)であることに気づかないものである。多くのチャンスが突然訪れた時には特に難しい。

今回の東欧の事態がアフリカと類似しているもう一つの点は、期待の大きさに反比例する指導力不足のために非常に危機に見舞われかねない状態にあることだ。

例えばザンビアでは、旧宗主国のイギリスの黒人に対する教育が充分

生み出すインセンティブに欠け、情勢の変化や、アメリカと軍事的に対抗するための生産の向上に素早く反応できず、控え目ではあるが確実に増大しつつあるソビエト国民の要求を満たすことができないマルクス主義経済システムの限界に直面している。そこでソ連の社会構造に存在せず、これから作りだす時間もない産業、商業、金融のインフラ（社会基盤）を供給できるモデルを西ヨーロッパに見出したというわけである。ソ連には自由な商取り引きの習慣はなく、ソ連政府自身の試算によると、ソ連経済を再建し西側経済と肩を並べさせるには少なくとも二十年はかかるという。

ゴルバチョフ大統領の壮大な計画は、まず「ソ連は敵国」という西側の意識を取り除くことから始められ、「一つのソ連、私達の共同の家」の提唱、つまり八億六千二百万人の社会、世界最大の市場の誕生によって完結する」という。

## 新しいタイプの人間の誕生

私達はアフリカで得た沢山の教訓から、MRAが特定の宗教や政党や国家に偏らない普遍的なイメージを保つことの大切さや、誰もが変る必

要があるし、誰もが変わりうるということ（もつとも、その表現には工夫が必要だが）の大切さを学んだ。クレムリンは社会を機能させる新しいタイプの人間の誕生をかつてより望んでいたが、今でもそれは変わっていないようだ。

ゴルバチョフ大統領は共産主義の抱える矛盾は承知の上で、イメージ改善を図ることによって有効に機能しているように見せかけようと努めているようだし、一方、サッチャー首相を初めとする西ヨーロッパ諸国の指導者達も、資本主義も同様の矛盾を抱えているにも拘らず、立派に機能しているように見せようとしている。しかし、どちらも人の行動意識に基本的な変化をもたらしてはいない。

その点、聖書の「山上の垂訓」の中でキリストは貧富やクリスマスチャンであるか否かが人の幸せを決めるのではなく、心清く、憐れみ深い者が幸いだとしていることは味わうに足ることである。つまるところ我々は自分の生活以上のものを与えることはできないのだ。

（終）

筆者のテリー・ギブライト氏は、アフリカ・ザンビア国駐在MRA代表として二十一年間にわたりアフリカ各国で活動した体験を持つ。

## 新しい出版物のご案内

# 日本の進路を決めた

・国境を越えた平和のかけ橋。

**10年** バーゼル・アントウィッセル 著  
藤田幸久 訳

ジャパンタイムズ出版部 定価1800円(本体1740円)

本書は、生活に追われ、希望を失っていた日本人の中に、真の民主主義に目覚め、国際社会に復帰しようという意欲をかき立てようとした十年間の著者の体験をつづったものである。有力な政治家、実業家を回想しながら著者は、当時の日本人の平和に対する真しな努力を伝えている。著者の眼は経済大国として新たな国際的孤立に直面している現在の日本に対する警告の意味を含んでいる。特に韓国やフィリピンへの謝罪を率直に表明した当時のMRAの日本人関係者の態度は、最近の日韓関係の推移の出発点として注目される。(90年6月3日朝日新聞読書欄書評より抜粋)

○全国の書店でお求め下さい。  
MRAでもお取り寄せいたします。





# 悲しみはメコン川に流して……

ラオス系日本人が見た日本社会

第二の祖国

ニッポン

麗沢大学助教授  
竹原 茂  
(ウドム・ラタナヴォン)

たけはら・しげる (ウドム・ラタナヴォン)

1943年ラオスに生まれる。65年に初の日本の文部省国費留学生として来日、東京外語大学、一橋大学で学ぶ。大阪万博ラオス館副館長などを務めた後帰国、ラオス政府経済計画庁に入省。74年留学生として再来日。75年のラオス政変でそのまま日本に留まり難民に。83年日本に帰化。現在麗沢大学助教授として仏語とタイ語、および国際理解、東南アジアの文化と生活を教える。在日ラオス人協会会長、モラロジー国際救援運動推進委員会委員、難民を助ける会企画委員、インドシナ難民連帯委員会常任理事としても活躍中。

内なる国際化のすすめ



悲しみは  
メコン川に流して

現在、私は千葉県柏市の麗澤<sup>ひがし</sup>大学で、仏語とタイ語、及び国際理解、東南アジアの文化と生活などを教えています。

私是一九四三年、ラオス南部のサワンナケット県の草葺屋根の家に、五人兄弟の三男として生まれました。第二次大戦の真つ最中で私はまだ二歳でしたが、私の一家は仏軍と日本軍の戦火を避けてメコン川対岸のタイに難民として逃れました。やがて母が病死し、父とも生き別れになりました。戦争とかなばつて食べるものがなく、セミ、トカゲ、オタマジャクシ、カエルまで食べたことを覚えています。皆さんもいろいろな苦い体験をしていることだと思いますが、親のいない子供は不幸です。あんな経験は自分の子供にはさせたくはありません。

四年後、残った家族はラオスに戻り、祖母が野菜や漬物を売ったり、姉が小学校の教師をしたりして一家の生活を支えましたが、やがて家族は離散し、私と上の兄はカンボジア国境近くのおばの家に預けられることになりました。

そのおばが大変厳しい人で、毎朝

薪でお湯を沸かし、朝食の支度を手伝い、おばの子供達の服を洗濯してから学校に行き、帰ると水汲み、夕食の手伝い、皿洗いが終わってからやっと勉強をすることができるという日々を送ったのが小学校時代で、辛い時は、顔も覚えていない母のたった一枚の写真を見ては涙を流したものでした。

中学校は完全なフランス語教育で、テストで満点を取らないと奨学金を貰えませんだったので一生懸命勉強しました。

当時のラオスの教育は、フランスの植民地政策の影響を強く受けており、ラオス人のための教育なのにフランスの地理や歴史を学ばせられ、自分の国の歴史はあまり知らないといい現実には強い反感を覚えていました。

高校卒業後、学友の多くが西欧諸国に留学していく中、私はラオス経済を何とか発展させたいと思っていましたし、アジア人なのだからまず日本を知ろうと思いい、日本留学を決意しました。

一九六五年、日本の文部省国費留学生として初めて来日し、東京外国語大学や一橋大学で学びました。当時は漢字が全く読めず、右も左も分からない状態で大変苦勞しました。

今の私の日本語能力から私のことを華僑系のラオス人ではないかと思われる方がいるかも知れませんが、十四年前は日本語の難しさに何度も涙を流し、人生はいたるところ涙だらけだなあと思ったものです。とにかくそうして日本語と必死に格闘したことによって、私の日本に対する理解も一層深まったのだと思います。

七〇年に京都生まれの日本女性と結婚し、大阪の万国博覧会でラオス館副館長を務めた後、ラオスに帰国し経済計画庁に入省しました。七四年、留学生として再来日しましたが、翌年ラオスで政変が起き、難民として日本に留まらざるを得なくなりました。

八三年、「悲しみはメコン川に流して、世の中のために新しい人生を生きる」ことを決意して日本に帰化しました。竹はアジア文化の象徴であり、ラオスの原野にもしっかりと根を張っています。そして、ウドムは茂るとい意味なので、竹原茂という日本名をつけました。

日本人になれて嬉しかった反面、身も心もラオス人の私は不安と寂しさも感じましたが、「自分の故郷は世界と思え。その社会で貢献すれば必ず受け入れられる」という信念を持って生きてきました。

## 豊かな社会の忘れもの

最近、日本及び日本人に対する内外の批判を見聞しますが、大きく分けると二種類の批判があると思います。一つは日本や日本人が嫌いだという人達の批判で、あまり気にしなくていいと思いますが、もう一つは日本と日本人が好きだからこそ言い難いこともあえて言いたいという人達の批判で、これは是非耳を傾けて頂きたいと思います。

「日本人は冷たい」などと批判されるのは気分の良いものではありませんが、どこの国にも良い人悪い人はいると思います。日本社会が悪いということではなく、日本には古来からの道徳観があるのですが、金持ちになって「豊かな社会の忘れもの」をしているのだと思います。

その昔、各地の農村復興を命じられた二宮尊徳は「復興工事にはお金ではなく慈悲の力が必要だ」と言ったという話があります。まず人の心を回復しなければ村の復興もできないということだと思います。戦後の復興の過程で日本が忘れてしまったものを、日本の将来のために一緒に考えたいと思います。

また、日本人は自然を愛する心も持っているのですが、残念な

ことに大都会では古い建物が壊されて、どんどん近代的なビルに建て替えられています。私は子供の頃よくお寺で遊びましたが、日本のお寺は子供達を遊ばせず、駐車場にしたりして結構商売をしています。勿論、立派なお坊さんもありますが、この十四年間にその伝統的な心が失われてしまったように感じられます。

## 進行する「心の難民化」

次に、私なりに感じた日本人や日本社会の特徴を挙げてみます。

①日本人は仲間意識が非常に強くて仲間うちではお互いに敬意を表するが、他人には冷たいことが多い。自分達と同じでなければ「仲間外れにする」といったことから「いじめ」の問題が生まれてくるのだと思う。日本人の集団主義は世界でもよく知られていて成功はしているが、集団から離れるとある種の脆さも出てくると思うので、日本の国際化ということを考えて時、これからどうなるか心配だ。

②外国人（西欧人）に親切。西欧文明に憧れを持っている一方、アジアの国々の人々に対して優越感を持っている。日本に長期滞在しているア

ジア人は誰でも差別された体験がある。東南アジアは貧しいという意識があり、難民といえば汚く飢餓状態にあり、まともに服も着ていないと思っている。難民には飢餓難民もあれば政治亡命者もいる。日本に來ている難民はほとんど政治亡命者だということを知らない。

③教育熱心で教育水準も高いが、子供に甘く、叱るべき時に叱らない。男尊女卑の傾向が強く、若者が年長者を大切にしない風潮がある。

④異文化に対する対応力が弱い（一部の人を除いて）ため、異文化に出会うと逃げ腰的態度を取る。自国文化中心主義。日本社会は建前と本音を使い分けて生きる社会だが、ラオス社会は本音で生きる社会。ラオスの小乗仏教には二・二七の戒律があり、全て守れば欲望もなくなり本音しか残らない。だからラオスでは僧侶が皆に尊敬される。

⑤日本人は文明的・物質的生活ばかり追求して、真の文化的・精神的生活を忘れかけている。日本には心を鍛える場が少ない。有名校に入っているいい会社に入り、給料を沢山貰うことだけが全てではなく、豊かな

精神文化ということも指導すべきである。物質的には満たされつつあるが「心の難民化」が進行しているようだ。

⑥日本は近代的で便利な国だが、社会的な面では外国人にとっては閉鎖的で住みにくい社会である。若者はアメリカやヨーロッパだけでなく、留学や青年海外協力隊のような形で、もっと開発途上国に出て行ってほしい。そのために自国の文化や言葉をもっと勉強する必要がある。アジアの言葉に関しても、もっと関心を持ってほしい。これからはお互いに学び理解し合う時代が変わっていく。

日本の若者をもっとアジアの国々を目を向けたいと自国の自由と平和の素晴らしさを実感することができない。同じ人間でありながら不幸な立場にいる人々を思い遣り、理解することによって世界平和も少しづつ可能になる。そして自分のような難民も出ないように頑張っていきましょう。

## 日本の将来は アジアと共にある

戦争に敗れた日本は経済発展に力を注ぎ、今日、世界有数の経済大国として君臨しています。多くの諸先輩の方々が苦勞して技術発展に努め、

素晴らしき自動車や電気製品を開発し、今ではカメラや自動車を初めてする日本製品は世界中で高い評価を受けています。私が大学生の頃使っていた録音機は軽いもので十キロ位はありましたが、今はとてもコンパクトで、技術的にも世界のトップにあります。私はアジア人、そして日本人の一人としてこれらのことを大變誇りに思っています。

しかし、問題はこれから日本はどうしたらいいかということでしょう。ソ連ではペレストロイカが進行し、東欧諸国も自由化されつつあります。ECの統合も目前に迫り、カナダとアメリカも団結しようとしています。日本はどこへ進路をとればいいのか。

日本はASEAN（東南アジア諸国連合）にオブザーバーとして参加していますが、経済援助というお金の中でアジアのメンバーシップを買い取ったようにも感じます。勿論援助は必要ですが、これからはアジアの真のリーダーとして隣国に信頼されるようになっていかなければならないと思います。日本の将来はアジアと共にあることを忘れてはなりません。

最近の新聞に載っている海外の論評は日本叩きが多く、誉めたたえる

記事はまれにしかありません。私は日本に帰化してからこうした状況が気になって仕方ありませんし、一体日本はこれからどうなるのか考え込んでしまいます。海外での日本人旅行者の品行などから、日本人は金持ちだと思われてしまい、金銭的基準だけで日本が評価されている現状は淋しい限りだと思います。

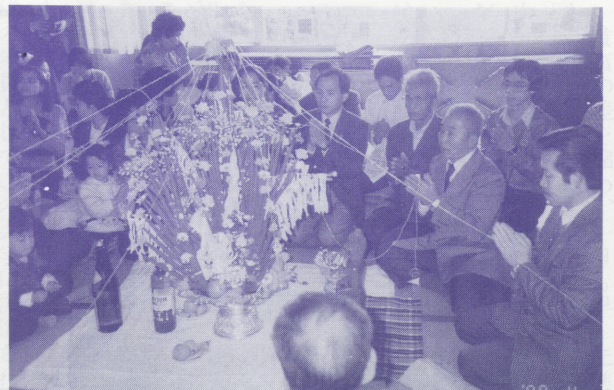
## 「国際人」より 「地球人」をめざして

現在、日本は難民、外国人労働者、留学生、中国残留日本人孤児などの様々な問題を抱えています。私が留学生だった頃、私がラオスから来たということを知ると、あの貧しくて内戦ばかりしている国かと態度を変えた人がいましたが、こうした態度を改めない限り、いくら「国際化」を唱えて英語やフランス語を話しても問題は解決されません。

「国際人」よりもまず、「地球人」になる努力が必要でしょう。人間の価値には、その人の属する国の貧富も関係ありません。ラオス出身だから

大学教授や政治家になれないことはありません。現にミャンマー（旧ビルマ）のウ・タント氏は国連の事務総長を立派に務めました。

九年前、難民としてラオスから日



●在日ラオス人の団結の証として旧暦のお正月を仲間と祝う筆者(右端)

本に逃れたボンダワン・チャントスックさんという女性は、病気で苦しむ仲間達を見て、看護婦になることを決意し、まず、准看護婦の資格を苦勞して取りました。その後、定時制高校を出て高卒の資格を得、看護学校に入學しました。在学中は常にトップの成績を収め、首席で卒業するという快挙に対し、市長賞が贈られました。

二人の妹さんも看護婦を目指して頑張っています。常に患者の気持になって看護をしていきたいという彼女に、「あなたの笑顔を見るとほっとする」と言ってくれる患者さんも増

えていると聞きます。

このような元難民だった人達の日本社会に対する貢献も、ぜひ皆様を知っていただきたいのです。国際化とは決して形ではなく、心の問題であるということの意味がこの一例からも分かってもらえるのではないのでしょうか。

## 「内なる国際化」のすすめ

日本に定住した難民に対して、「日本まで来なくても、自分の国に住んでいけばいいじゃないか」ということを言う人が結構多いのですが、インドシナの現状がもっと知らされていればこうした意見も出てこなくなると思います。いずれにしても日本人は人権ということをもっと勉強する必要があります。かつて日本も貧しかった時代があったことを思い起こし、外国人の問題を身近なこととして考えてほしいと思います。「内なる国際化」は心の持ち方次第で、いつからでもどこからでも始められます。タイとラオスに、「場所が狭くても苦にはならないが、心が狭いと苦痛である」という諺ことわざがありませんが、「経済大国になった日本の現在の宿題は、いかにして心を広げるか」ということだと思えます。心の広さがあれば、これからの日本は世界に

より尊敬されることでしょう。「衣食足りて礼節を知る」といいますが、今の日本は「衣食足りて礼節足りない」という状態にあると思います。

最近「衣食足りて住宅足りない」という言い方も出来そうですが、私の家も小さくて、子供も四人いますから自分の居場所がありません。私の住んでいる柏市は昔は何もない所でしたが今は地価が高騰しています。安かった頃に銀行から借金をしてでも土地を買っておけばよかったと残念に思います。

## 世界の国々から 尊敬される日本になろう

外国人を受け入れずに国際化を進めることは不可能だと思いますが、そのためには島国根性や自国文化中心主義というものを捨てる覚悟がなければなりません。日本は今まで、モノの国際化に成功してきましたが、これからは日本人と日本文化を国際化する時代だと思います。「真の経済大国としての振舞い」、「真の国際責任」というものが問われてくるでしょう。西欧のためだけの「国際化」であっては、真の国際化とは言えません。足元の国々の文化や言葉の素晴らしさを見落としてはいけないでしょうか。

目指すことが重要だと思います。

私はラオス文学の翻訳もしていますが、その中に「名誉や社会的地位ばかりに夢中になる人間は死を忘れ、自分がまだまだ若いと思っている人間は歳を忘れる。妻(女性)に夢中になる人間は両親を忘れ、お金(財産)に夢中になる人間は宗教(道徳)を忘れる」という文章がありました。宗教、道徳、思い遣りの精神が大切だと思います。

途上国の向学心のある青年が日本で勉強したいと思ってもなかなか簡単にはいかないのですが、数年前に当時の中曽根首相が表明した二十世紀までに留学生を十万人受け入れるという構想を早く実現させてほしいものです。部屋探し一つとっても、「マレーシア人は駄目だけど、アメリカ人なら子供に英語を教えてもらえるのでいいですよ」というような西洋崇拜アジア蔑視の風潮が残っています。私は日本の文部省の奨学金を得て日本に留学した後、ラオスの経済計画庁で働き、その後、難民として再び日本にわたりましたが、私の大好きなこの第二の祖国「日本」が、世界の国々から尊敬される国になれるように、一緒に頑張りたいと思います。

(終)

## 「MRAの歴史」のビデオ(ベータ) (VHS)

頒布中

頒価2,000円(送料込)

詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

03(821)3737





●マーケットで働く親を手伝う働き者の子供たち

# 青年海外協力隊員として アフリカ・ザンビアで 過ごした2年間(その10)

寒河江 亮  
さがえ りょう

## 私は一体誰のために働いているのか!

ザンビアは発展途上国として、あらゆる分野に外国の援助を必要としているから、こうして私達のようなボランティアが国民の税金を使ってはるばる日本から派遣され、「開発途上地域の住民と一体となって当該地域の経済及び社会の発展に協力する」(国際協力事業団法21条第2項)ことを目的として活動している。

そのことに疑問がある訳ではない。世界の中で日本の地位と責任がこれだけ重要になった今日、途上国援助は他国から言われてイヤイヤやるという性格のものではなく、日本の義務ともいえるだろう。

一方、その援助の、いわば最前線で働いている私は、そうした理屈だけではどうしても割り切れない思いを抱くことがある。

私はこのザンビアで一体何のために働いているのだろうか、時に自分を見失いそうになってしまうのだ。「私だけが頑張ったところで一体何になるのか、誰もついてこようとしていないではないか。学校当局、そして肝心の学生達に、私と一緒に汗をかく気が本当にあるのか。」

最も熱心に講議を受け、上達も早いのは北朝鮮の留学生達という現状

をおかしいとは思わないのか。

私のような言葉さえ不自由な外国人が、大学で堂々と教えているというこの現実を彼らは恥ずかしいとは、それを何とかしようという気持にはならないのか。

貫えるものなら、タダならば、何でも平然と受け取るのか。

彼らは果たして、これからも未来永劫外国から助けてもらうつもりなのだろうか。

日本のODA(政府開発援助)には必ずしも自慢できない点もあるということは、私も勿論知っている。また、お前のようなたいした実力もない人間が偉そうなことを言うなど反論されれば、確かにその通りである。

しかし、その力のない私以上にザンビア人が働こうとしないのではお先真っ暗ではないか。日本をモデルにするべきだなどは口が裂けても言わないが、しっかりとくれよという気にもなるというものだ。

このような状態では、せっかくの援助もいつまでたっても一部の特権階級とODAの利権に群がる人達を太らせるだけではないのかとさえ感じる。

「貧富の差を縮め、一日も早く先進国に追いつくようにするのが政治に次いで教育とジャーナリズムの責任だ」と思うから、その現場にいる私はいらいらが募る。私に残された時間はあと一年しかない。

## 初心に還る

張り切って赴任した一年前、いきなり廃虚同然の暗室を見せられた最初のショックから立ち直った私は、この二年間という限られた時間で、あらゆる手段を使って写真の講義を軌道に乗せ、私の交替隊員が少しでも教えやすい環境を作ることが、初代の隊員としてこの大学に派遣された自分の義務なのだと自分に言い聞かせてやってきた。

正直に言えば、ただでさえ短い二年間の任期の大半を交替隊員のための基盤整備のために費やし、技術移転という観点から見ればほとんど何もやれずに終えてしまうことは非常に不本意だが、こは心を大きく開いて、あくまでザンビアの写真技術の将来のための礎石になろうと決心したので。

だから余計に腹が立つ。フラストレーションがたまるのだ。

と同時に、この問題は性急に結論を出すべき性格のものではないとい

うことも私には充分わかつている。先輩隊員にもきつと同じような思いから来た人達がいたことだろう。

そもそも私達協力隊員のしていることは、広い意味では技術協力ではあるが、人間と人間との触れ合いの中で共に成長し、学びあう人的交流でもあると理解している。だからある意味では、少々成果が見えてこないからといってじたばた騒ぐほどのことではないという言い方もできるだろう。

それから、長い時間をかけて彼らの風土の中で培われてきた社会的・歴史的な構造が、私達が来たからといってそう簡単に変わるはずもない。私は日本という経済大国から来たからといって、或いは(吹けば飛ぶような技術を持っているからといって、彼らを見下してはいないつもりだが、彼らのペースを尊重する配慮に少々欠けていたかも知れない。

誰のために、何のために汗をかい直に答えれば、それはザンビアの発展のためであると同時に、私自身の形成のためでもあったはずだ。言い方を変えるならば、私はここで人間として大切な何かを学ばせてもらっているのだから、腹を立てること自体、間違っているのかも知れない。

それによく考えてみれば、私がいかに立派な計画を立てても、独りよがりですらに信頼関係がなければ、絵に描いた餅同然である。私が主役ではないのだから、決して上手くいくはずがないだろう。私の今までのやり方にこの視点が欠けていたのかも知れない。やはりここは初心に戻って、彼らの立場にたつて、その気持や考え方を理解することから始まってはいけないのだろう。

## 援助とザンビア

とにかく、こんな大事どころで挫ける訳にはいかない。なかなか簡単に答えの出る問題ではないことは確かだが、まず、やれるだけやってみることにする。

教育というものは写真に限らず二年や三年で目に見える成果が上がるものではない。ザンビアの発展に不可欠の中間技術者の養成は現時点では夢のまた夢であるが、彼らと一緒に一歩一歩着実に進んでいくことが大切なだろう。そのためにも、まず、彼らがジャーナリストの卵としてどのような問題意識を持っているのかということを中心に把握しておかなければならないと考えた私は、「外国援助とザンビア・ジャーナリスト」として、くに祖国に貢献できる

か」というテーマでレポートを提出させることにした。

全く写真の講義とは関係なく、かつ微妙な点も含まれているテーマなので、もし学校当局に報告でもされたらまずいことになるかなというためらいもあったが、まあ、その時はその時だと開き直って実行した。その幾つかをご紹介します。

## 植民地主義の犠牲となつたザンビア

プリシラ・ジェレー(女 20才)

外国援助とは、貧困、飢餓、伝染病などの人類共通の敵と闘っている発展途上国に対して、先進国が行う援助である。

先進国とは産業や技術が高度に発達し、より快適な生活を目指して技術革新に専念している国々と規定することができ、途上国とはすでに述べたような人類の敵と未だに闘わなければならない国々を指す。例えば、英国、アメリカ、西ドイツ、日本などが先進国であり、インド、ザンビア、タヒチなどが途上国である。

外国援助は技術援助、経済援助、人材援助の三つの分野に大別できる。現在、わが国は発展途上国として外国の援助に大きく依存しているが、それは、英国がわが国を植民地支配



●ディスコダンスとビールを朝まで楽しむ学生たち

していた頃、天然資源を母国に送ることに専念し、ザンビアの開発を怠った結果である。

わが国が独立した時、それまで無視されてきた数多くの人々の教育に最も力を注がなければならず、国の工業化が立ち遅れてしまった。

わが国は独立後、貧困との闘いのもとより、あらゆる分野での開発発展を試みてきた。近年の世界的経済不況により途上国は最も大きな痛手を受け、新技術を導入する資金に乏しい途上国は、先進国に対して援助の要請を余儀なくされた。

内陸国という地理的制約を受ける

わが国にとって問題はより深刻である。輸出入とも他国の港を使用しなければならぬため、運送料や港湾施設使用料を貴重な外貨で支払わなければならない。

また、わが国は天然資源に恵まれているにもかかわらず、技術的な問題でその資源の最終製品化に関しては先進国に頼らざるを得ない。自国内で製品化し、天然資源の価格よりも高い価格での輸出を可能にする技術援助が是非とも必要である。

援助の一例として首都ルサカのマスメディア・コンプレックス（テレビ・ラジオ放送局）がある。この建物は日本政府の援助で建設された。必要な機材も日本政府から贈られたものであり、ザンビア人に操作法を指導する人材も日本から派遣されている。援助なしでは実現不可能なプロジェクトだったと言える。

わが国最大の病院、大学教育病院（UHT）の小児病棟も同じく日本政府の援助によって建てられた。

世界銀行も、資金協力や学校建設などでザンビアを大変助けている。国際機関の一つである。中国も、ザンビアとタンザニアを結ぶタンザン鉄道の建設を援助してくれた。内陸国ザンビアにとってこの鉄道の輸送に果たす役割は大きい。

ノルウヰ政府の援助プログラム（NORAD）は主にザンビアの食料計画を支援し、特に飢饉に見舞われているグエンベ溪谷の人々の救援に当たっている。また、農業技術者の育成にも取り組んでいる。

北朝鮮（朝鮮人民民主主義共和国）は、カフェに小麦農場を建設したが、将来、そこで生産された小麦の輸出が期待されている。

以上の例からも明らかのように、わが国は外国政府の援助なしではやっていけないのであり、それはちょうど發育盛りの子供が大人の助けを必要とするようなものである。

## 求められる 勤勉と献身の精神

アイザック・マランボ（男 23歳）

わが国は他の多くの発展途上国と同様に、数多くの経済的困難に直面している。技術レベルも未熟である。長引く早魃により食料も不足している。失業もかつてなかったほど増え、企業への投資が利益を生みださないため、産業も徐々に衰退の道を歩んでいる。

今日、わが国はその経済構造の活性化と発展を先進国の援助に頼らざるを得ないが、将来この完全依存状態から脱却し、自ら立ち上げられる日

の来ることを願っている。

わが国の持つ豊富な天然資源を最も効率よく活用するためにも、政府は人的・物的な技術援助を選択すべきである。もちろん、飢饉に苦しむ餓死寸前の人々を救うための緊急食料援助は大変に重要だが、「魚を与えよよりもその採り方を教えるべきだ」という考え方に代表されるように、このような援助は怠け心を助長するだけだという批判的な声も一部にある。私達の問題は結局、私達自身で解決しなければならぬ。

私達に勤勉と献身の精神が求められている。援助は確かにわが国の発展に寄与するが、過度に依存することは怠け心を助長し、問題を自ら解決しようとする動機付けの妨げとなる。

わが国の抱える問題の解決のために私達自身が真剣に努力し、西側や東側の国々に安易に援助を要請する態度を改めない限り、私達はいつまでも貧困から逃れることはできない。援助を最大限効果的に使い、現存する産業の改善を図っていけば、やがて食料や医薬品も充分に行き渡り、生活水準も改善されていくだろう。そのためにも社会の目として様々な社会問題を一般の人々に平易な言葉で伝えていきたい。

## 将来他国を助けられる 国になりたい

ヴィヴィアン・ムクカ（女 21歳）

ザンビアは二十年前の独立以来、外国の援助に極度に依存してきた。発展途上国、または第三世界の一員として、わが国の経済は先進国の援助に支えられてきた。

わが国が独立した当時、銅などの天然資源の価格が高かったため、沢山の外貨を獲得することができ、食料も豊富だったという。さらに当時、多数の外国人が様々なプロジェクトに投資しており、経済状態は決して悪いものではなかった。

しかし、新政府の誕生と共に状況は一変した。新政府の非植民地化政策の一環として、それまで外国人が占めていたポストのザンビア人が進められた。

その結果、多数の外国人がわが国を出国し、投下資本も引き揚げられた。さらに、外国人技術者によって管理運営されていた様々な社会基盤もたちまち人員と運転資金の不足に直面した。外国への援助の要請が残された唯一の手段であった。

独立時、大学卒業者が僅か五十人しかいなかったわが国は、経験豊かな人材の派遣を先進国に依頼しなけ

ればならなかった。現在、世界中の国々が無償で技術者を派遣し、彼らの持っている専門知識をサンピア人に分け与えようと努力している。将来、わが国もこのように困っている他の国々の人々を訓練できるようにしたい。

## わが国が自立する日のために

ハッサン・ムブエ(男) 22歳)

産業や天然資源を効率的に運用するための資金と熟練技術者が不足しているわが国は、陣営の東西を問わず、先進工業国の援助を受け入れて、さらに多様な産業分野において、要としている。教師、医師、技師、農業専門家などの技術者が特に求められており、ノルウェー、アイルランド、スエーデン、ベルギー、イギリス、アメリカ、日本その他数多くの国々がわが国を援助している。

援助は非常に大切なものであるが、わが国が永遠に被援助国であり続けるということの意味するものでは勿論なく、私達が自立できる日が来た時には援助に頼ることを直ちにやめなくてはならない。

私は将来、ジャーナリストとして以下のような方法で国家の発展に寄

与したい。

まず、事実に基づいた正確な記事を書くことにより、読者が不必要な不安感や警戒心を抱かなくてすむようにしたい。そういうものに捉われた人々は互いに指を差しあうことに集中し、その結果、国家の発展が阻害される危険があるからだ。

次に、他国の発展状況や国内の開発に関する記事を書くことより、よその国に負けずにはっきり働くための動機を与えたい。例えば、東部地方の人々がいかにして力を合わせて学校を建て、地域の子供達に教育の機会を与えているのかということの記事にすれば、西部地方の人々に自分達にもやれるという希望を与えられるかも知れない。

自助努力のための助言になるような記事を書いて国家の発展に寄与していきたい。

彼らの夢の一日も早い実現に少しでも貢献できるよう、「その国の住民と一体となり、彼らの言葉で語り、彼らの心情を理解し、彼らの社会のルールとリズムを尊重しながら、彼らの自助努力の道に力を添える」(隊長ハンドブック)という言葉を残された一年間、忘れることなく働いていきな

(第一部終了)

## 事務局近況

●MRAとの各人各様の出会いと体験を集めた小冊子「出会い……MRAと私」第3集が完成しました。今回は7名の方々に、MRAを自らの生活の中で実践することによって生じた具体的な変化や意識改革の体験を語って頂きました。抽象論ではない活きたMRA実践記としてごく自然にMRAを理解して頂けることと思います。ご家族、ご友人にもぜひお薦め下さい。ご注文は事務局へどうぞ。1部300円でお頒けしております。

●今夏のスイス・コー世界大会は7月9日の開会式「隣人同士、国同士、東と西が互いに学びあうもの」を皮切りに、産業人会議、コー円卓会議、青年会議、都市問題会議、アジア・アフリカ・太平洋・中南米地域諸国会議、そして8月下旬の開会式「様々な変革の動きを活かすために」まで約50日間にわたって開かれます。また、台湾でも台北、高雄などを会場にMRA国際青年キャンプが7月下旬に行われ、日本からも数名参加します。その体験や感想を聞かせて頂くコー世界大会及び台湾MRA国際青年キャンプ報告会を9月下旬に開催しますのでお気軽にご参加下さい。日時・会場が決まりましたらご案内させていただきます。

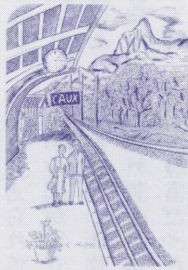
## — 私たち一人ひとりの在り方が国の在り方 —

○MRA体験記

頒価 300円

## 出逢い……MRAと私No.3

出逢い……



MRAと私  
No. 3



## 好評頒布中!

お申し込みはMRAへどうぞ

03(821) 3737